

ポスターB-2

ポスター発表(実践)

統合学習のための補助教材
—自ら読み、考え、表現する活動を目指して—

丸山多賀子・筒井美貴(兵庫県立芦屋国際中等教育学校)

本校は、公立の中高一貫校で、生徒の8割が外国にルーツを持つ生徒である。中学1・2年では母学級を持つが、日本語指導が必要な生徒のための少人数クラスが、国語だけでなく理科・社会・数学にも設置されている。少人数クラスでは、「内容の焦点化」、「視覚化」、「スモールステップ」を心掛けた授業がおこなわれ、通訳講師のサポートもあり、授業への参加と理解への支援は整っている。日本語教師もTTとして授業に参加しており、理解支援の一つとして、教科の言葉(漢字)プリントを作成してきた。

しかし、漢字のワークシートでは、「教科書や問題集を教室で教師とやればできる」ステージから「一人でできる」ステージへの支援にはならなかった。自律した学習者にするためには、一人で教科書を読めるようにならなければならない。そのためには「読解力」が必要になってくるのだが、一言で「読解力」と言っても様々な力に下位分類される。国語の授業で物語や説明文を読むストラテジーと、教科の教科書を読むのとは、使うストラテジーも違う。そこで、小貫・桂(2014)で整理されているユニバーサルデザインの階層図(参加・理解・習得・活用)を意識し、中学2年生の理科と社会を対象に、補助教材を作成することにした。作成する際には、次の①～④を意識した。

- ① 教科書の文章を使用し、橋渡し推論やそのほかの読解ストラテジーをトレーニングする。
- ② 単元で教科内容としてキーポイントになる内容について、言葉での言い換えや図式化、表作成、逆思考の問題などを作成し、なんらかの形でアウトプットしていく。
- ③ 内容の重複を仕掛けていく。(スパイラルカーブを作る。)
- ④ 他教科の内容や日々の生活に結びつけて考えるような問題を作成する。

点数としてはまだ成果は現れていないが、教科担当の教師の理解が高まったことは、小さいながらも成果の一つである。また、補助教材のイラストや問題がエピソード記憶として残り、何ヶ月も後の国語の授業時にそれを再生でき、生徒自身が驚くという経験をした生徒もいる。このような経験を積み重ねていくことが、スキーマを構築し、習得した知識を自分で活用していくことにつながるのではないかと考える。

【引用文献】

『授業のユニバーサルデザイン入門 どの子も楽しく「わかる・できる」授業のつくり方』
小貫悟・桂聖 東洋館出版社